繪本直指寶 一

1745

750
.T2

Tachibana Morikuni

Ehon jikishihō

畫師浪速橘守國

直指寶

浪華書舗　稱觥堂版

畫本直指寶叙

畫道蓋難言也○難言者傳神寫照是而已矣○夫高雅清逹之情趣○林泉烟霞之高致○結目送所在而含毫命素○聚精神於両一○會天

眞於幽澹。自然表外之生氣。物與心手相湊。神之又神。而一塵不入者。畫家所謂生動之韻耶。如蠅染屏間。孫郎拳手。水鳴牀上。唐帝心驚。則三寸不律管

上。寓天機之玄化。忽乎不可知焉。汎乎不可測焉。所謂造化在手者。信不妄。可謂傳神寫照之妙。點入之頭頭。徹之丹青。三昧盡矣。郭若虛深賤衆工。雖曰

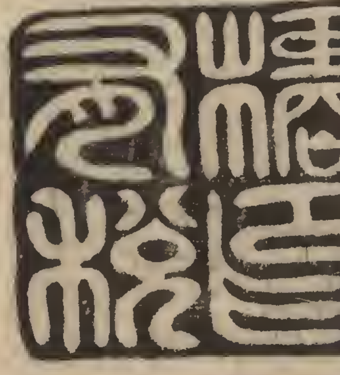
畫而非画者○蓋以能傳其
形而不能傳其神也○傳神
寫照乎難哉余往歳圖寫
寶袋及通寶志傳于世頃
採鼠蟬之巣○彙平日之稿
繕寫為十巻名曰畫本直

指寶和也漢也于物于事
任意收圖焉○想雖経過上
心矣○雖寄樂情景兵去来
無認但圖而可傳者○夫惟
画乎○直指寶者余一家之
珍也耳○観人勿為猫兒類

大虫之讖於是乎叙

延享元歳甲子十一月

後素軒橘守國



和漢畫家傳説

畫に和漢の別あり所謂流義を分つて各学ぶ所の傳来及び一家の骨法を傳ふるによつてなり古昔本朝の畫圖の名手多し中にも百済河成巨勢金岡藤原信實（土佐氏の祖なり）皆本朝の名をなし大和繪の達人なり然るに後小松院應永年中異國より如雪乱芳軒といふ者来朝して漢畫を畫き名は當時に播く狩野正信といふ人其門に入て如雪を師とし学べり又周文といふ唐僧漢畫を能し雪舟を師として畫法を習ふ此時正信も同じく周文に教を受けり雪舟正信同学なる故両人の筆勢周文に髣髴たり又茲に藤原信實の末裔に土佐

光信といふ人あり天性和朝の絵を工にし遠祖行実にも恥ず大
和絵の第一と称せ正信が宗子元信光信が女を娶て姻家の好を
結び且光信に大和絵の画法を受たり此時諸国乱て戦闘
しげく打つゞき世間物さわがしければ元信も難を紀州に辟あるいハ
泉州和州に身を潜て太平の時を待り雪舟ハ筑前にあり
芦屋に寓居して釜の絵を書て給食に後大明国に渡て張
有声を師として画乃業を習ひ日本に帰る本朝草画の始
なり是より以前ハ皆真にして草なしこれを唐絵師といふ又
元信ハ本朝に生れて何ぞ異邦の風骨を事とせんやと謂て
漢画を物乃始と為に本朝乃風格を建んとて是に於
て和漢の画風を分ちて雪舟ハ漢絵師と名づけ元信を

本朝の絵師と称せらるところ元信を本絵師と称せり
これに因て自然と狩野氏を流義乃無名に呼来りて嘗て
明国の鄭澤といふ画者元信に書を寄て實に狩野氏ハ画
家の徴證なりといへり依て狩野家の眉目本朝の英誉と
いふべし蓋し画家の説に画に本と末とある事が故に筆勢の
元ならざるを本絵とし如ざるを末絵と名付となりて又末絵とハ
其絵の元に似ざるハ悪き故にまがひといへり然どもまた紙
人物を悪しといはで門成が童の面を写し為其人とせる宗旨
中の人を写して傳説を得たる類豈いかんせんや但生写といふ事
を折乃言なるべし爭で師の教を守事あり其正に中する
物を能釵索目撃るべし一微細乃出所といへども生するを

凡さんすゐハ傳神の妙手胸襟と申難しきものなれバ
さればこそのは古人の畫をむかし畫だし生のまゝいふ
ばかり工に写し出すといへども筆格骨法を失ひ其詮なし
故ゆりまた遠られ畫ふ近き意といへり大抵其の如く寫し出し
難き物ハ岩の圧出波の瀾文なるべしされど其物を
心に会得し筆法ありくて千万人の視る所岩と波との
別ありといふ或ハ其れの是に如くは草木禽獣蟲魚甲鱗
の類ハ各く異なり万種の殊なるに随て究も似ざれば物
ハ畑にあらば雨露の膏に角ぐむ花木陽氣に向ひ萌出る
草花も時節の風を花葉に好く春の草は竪に葉ハ
靡き秋ハ冬ハ跡甚しく何も筆勢の玄妙に在て感ある

風情を調ひ是皆其るる物を畫ふに能寫を所謂なりずや
然るに生物に似ると非となる者ハ一偏の偉論にて未さ盡法の
一端をも知ざる兒輩の言にて評とるに足ざるなり然るに上中下
三品の論ハあれども本とは定め難し畫ふを学ぶもの
畫家の道を重く知るる師に就て其の理を討論し會
自から思ひを尽し會得の期に及んで名手の誉を得るべし
又世に男女のうるはしき姿を写して大和絵といへれど是ハ
浮世絵といふものなり我の大和人物といふハ土佐氏が画る
所をいふに源氏物語の巻を写し出し又古への奇絵絵に
或ハ昔物語の作人を圖に雅体を誇りなしそれぞれの衣
被りまゝむかしの帝女等然ふ好の角袋その物を

そのほか人老若抱見の体又は農家の耕作賤山がつのさまを
うつせる多し今の浮世絵と比ぶれバいとも古風質朴
にして筆勢亦絶妙なり又狩野氏が畫く源氏物語の
束帯姿官女の﨟たけたるさま或は戎胡英雄の武者
態土佐氏が絵ハ文を著て質を飾る又和國乃人
物美を尽し善を尽せり其外名所和歌絵山川
草木鳥類しるせる多し又画家に五彩を施こす紙
ありて丹青の名あり丹青とは人物を絵がくをいふに
あらず本地理図を丹青といふなり其昔虞舜乃御
時四瀆の水溢れ天下に洪水漲り田畠を損じ穀
物を流し居りしかバ農業の害深き故即ち禹王に

命じて普く天下の水道を正し洪水を治めしむ
すなはち國々の地理を圖となしたまへども其の径陸の衢
無別ならざるが故に水乃流ゆく道條または絵具をもつて
彩て人の通路の往還又は丹き絵具を用ひなどしこれを
丹青といひたり凡そ地理ハ一面にして平なりされ
境を分ち水陸の道條を写し分るなり又絵圖といふも
あり絵に三面を見する事用あり大山小山の高低大河
小川池堤田畠其外樹木草原寺社人家なども委し
く写し其形を交へて色の彩を用ゆる故なり絵
圖といふなりかくて丹青の法を始めにひろし漢の沛
公秦を破る時諸卒皆秦乃官庫に乱き入数多の

珍寶を奪ひ掠むる時より蕭何といふ賢臣ひとり秦の
相府に入て其の寶貨に目もかけずして天下の地理図を入
し匣を懐にしたりより後蜀の桟道を張良が焼絶しを
兼て蕭何と識て外に道ある事を志れども諸人の知を奪ん
為の謀略なり嘗て張良韓信を進むる時韓信が云蜀の
桟道絶て行べき道なしいかにして漢中へ入るべしといふ時に張良
懐中より小図紙出し陳蒼といふ道を教へ漢中へ行し
も是も蕭何が地理図を得し故なり是れ此志に丹青
の徳なるべしや

絵本直指宝巻之一目録

蚕家織婦之図　蚕家の産業を委しく図を
唐子遊之図
嬰児虻行の図　双六拵
弾琴図　囲碁の図
書画を学ぶ図　琦楽の図
鶏合の図　競舟之図

花車の図

輦乃図

雪中の遊

耕織乃者のもの天下は通竅にし男女辛苦の手になれり 夫まる
五穀を耕し女は蚕を養して絹を製をされば織ものは服せず耕をとのは
餓ん乃食わりといふ古言を云へがあるとも方を姫し手先年通竅
志に略田家耕作の教容を図をといふ又蚕織乃図絵編せりよって今茲ふ
其首尾を略して蚕家の勤る事業をあらはすもの也

蚕種乃紙をう産付なるが春三月中氣穀雨前ばかりに生れ出るとなると

はやあり洗ひ帰て出て一番二番なども分ちわ水へ入の葉の養ふをもるざみあまみありもと黒子ともまるぞくともはやあり

そのようにし
桑乃葉を
刻て製するに
いとま
なし

蚕三度の
休乃後
桑をあたふるに
次第に
大きになり
漸く多くなる
故りかの
竹簀令ろ乃

蚕分四度めの体をば大眠ともにはの体ともいふなり追付起を出さるに時をうかゞひ用意をなす体なり

蚕ハすでに大眠起して後ハ桑の葉くらふ事前よりハ多さゆへ桑の葉を採製するハいとまなくいそがはしく侍なり

蚕まゆを
作りゆゑていふとは
麿を蓋の穀に
糸葉までの袖とおなじく
ひとりしろ蚕を

蒔て葉をむしりて
まゆを紙をとり
其日もして後まゆを
一所に
ちぎるなし
天あり
まゆ派物を
筬と
いふ
なり

馮錦袋後編之續 一

蚕種をとるに先まちて
簇掛より
元時節のまれ
蚕をあらんで
糸をとりそり
的蚕ハ蛹の
蝶になりて出る

牝牡をつがひにして
紙の移し卵ハ
暖くなるを巻待まり
これを
うみつけし
よし

蚕糸を吐繰り
蛹乃
蝶になりて飛
これを
蚕蛾と
いふなり

生繭を塩に
漬る事あり
大き成壺
の内底よ
竹の簀て
入其
上に桐
の葉を
敷又
其上に
繭を
敷
並べ
又
其上
桐の
葉を
敷
塩と

かり
かけ
紙蓋
して
上を泥
にて塗
ふさぎ
七日し
て取
出し
釜に入
繰れ
ば糸多
く取る
なり

繭より糸をなし
色白く
いさぎよきを
細糸のまわたとし
色黒きを
粗糸のまわたとす
真綿は
いくまも
上中下と
格を
わかち
形を
作りて

束綿
幾ばく
把と
いふ
なり

蚕乃神を祭る事日本の古しへを
考ふれば軻遇突智埴山姫に娶て
稚産霊を産此神の頭に蚕と桑生
ありと神代巻に見へたり又本朝にてハ
稚産霊を祭る事紀をのせ又第二十二代
雄略天皇乃御后親ら蚕し玉ふ
事日本紀に見へたり唐土にてハ
黄帝乃后西陵氏を始とせる事
通鑑に出たり

唐子遊

字書大全曰婦人の乳子を嬰と云婦人ハ胸に嬰と云物をかく故に婦人の子を懐に抱ハ衣の衿ひらけて首に物をかくるゆへしようつく女の兒を嬰兒とハとより来にて組其裾よ小き鈴を付て胸ふかヽ掛るなり

嬰童双六乃拵
并ニ朱三朱四のゆへ
唐の玄宗楊貴妃と
双六をうちたまひ
玄宗詔曰
いつくり重四を
請く此勝を
詞をまさうに
入ゐになさんと
のたまふ
貴妃も まさに
重ことを請て
然妻が
いつに依て
入ゐになさんと

投じて賽を盤に
あり出されたるは
賽筒の内より三るに
破れて三ろふたび
為ず出ければ 四ろ
されば入ゐを
紅衣を賜はられ
より名
入ゐの
下にこと四字
朱にさし
をはり
もとより
重三 四字を
朱三 朱四と
いふなり

少女琴を弾ず

琴ハ伏羲氏の世よりへ六弦ちうをはつて其の音律ふ合せ神仙と路を遊ぶ ある雅音秦れ始皇帝荊軻が為にはばふされしとし沉ふ害に及ぶ時始皇も只一人一曲の琴を弾ぜんと泡に屏風の後より人がでて影ざん七尺の屏風も跳らバなどか越ざらんとよ巳もすんかれば始皇こちらをさとり荊軻がひ人と御衣の袂をゆり切り七尺乃屏風をおどり越あやうき難を逃れ一のてもも一曲の琴の徳なりとぞ

九三面の
拓びを
敵味方れ
営を張
陣と対して
擬と戦ひ
勝負を争ふ
形容絵
模れ

小童囲碁乃遊

小児書画を学

唐土の小児八歳の時より小学校に入れ勧善懲悪を教十五歳に及んで大学校に入しむ聖賢の心を学ばしむ先文書は文をとする所にして学文書は是天下の通宝なり又書画ともに本一体の物なり書は言を文字の上に現し画は万物の形をあらはし出す共に字芸の中にして其徳用広大なり又画といふは丹青とも云ふ和漢画家伝説に深からずおとし

小兒騎樂之圖

闘鶏(とりあはせ)乃遊(あそび)ひ

端陽龍舟　競舟とも云

戦国の時楚国に屈原と
云賢臣あり子蘭と云佞臣
屈原を精ミ悪さまあしく
讒云せしによつて江南よ
流され終に汨羅に身を投
し死せり其弟子として龍舟を
飾りて或ハ帝よ殺多宗
鼓をうちて競ひ渡り
龍魚を招くといふし
伝物語湖水にうかび
とふ今肥前の長崎
に毎年五月五日の
中に舟を装ひ旋
湊の中をまハれり

是を扶竜といへり
其外に長崎ハ
唐人来りて
逗留するゆへ
日久しくよつて
廿日に端
是ハ屈原
を祭る
まん今
舞で尓の
去此義式
をと
なせり

小児花車乃

雪中乃拵
宛中に形を拵げ氷柱と嘗
大雪降積え地と濵に
小児集り搦襲免て
毬となして是と
戯し或ハ鳥獣の形を
て作り楽しむ小児の気
象めくのおもしろさり
百子乃拵を圖
と形に雪中の
戯を
第一
とん

輦(てぐるま)のあそび